



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第15主日 A年(2023年7月16日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 55章10—11節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8章18—23節

福音朗読：マタイによる福音書 13章1—9節(短い形式)

## たねま 種蒔く人

三つの朗読から

第一朗読では「神の<sup>はたら</sup>ことばの働き」がテーマとなります。神のことば目には見えませんが、天からの雨のように降ってきます。それは、まるで種のごとく、人の心に蒔かれます。そして、その人を成長させ、再び神の元へと帰っていきます。

第二朗読では、神のことばを心に蒔かれた人が<sup>たいけん</sup>体験する「うめき」がテーマとなるでしょう。「神の<sup>みちび</sup>霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」(ロマ8章14節)とパウロは<sup>かくしん</sup>確信をもって言い切ります。しかし、「神の子」でありながらも、現実の生活の<sup>きぼう</sup>苦しみの中で、希望への「うめき」を<sup>はっ</sup>発しながら生きていくのが人生なのかもしれません。「うめき」とは、第一朗読との<sup>かんれん</sup>関連で考えてみると、<sup>め</sup>こころに蒔かれた種が芽を出すときの苦しみ、種から「いのち」へと<sup>うつ</sup>移ろうときの<sup>いた</sup>痛みなのではないでしょうか。実際、イエスさまも「うめき」ます(マコ7章32,34節参照)。「うめき」ながら生きる人間への<sup>ふか</sup>深い<sup>きようかん</sup>共感がイエスさまの中にあるからです。

福音朗読は「種蒔く人」のたとえ話ですが、種蒔く人は、ひたすら蒔き続けます。必ず<sup>みの</sup>実りがあると信じて。種蒔く人はイエスさまです。イエスさまは神のことばを<sup>かた</sup>語り続けます。たとえ、<sup>てきたい</sup>敵対する人、受け入れない人、あざ笑う人がいようとも。それはイエスさま自身が神のことばによって生かされているからであり、神のことばには力があると信じているからです。

今日の福音朗読についてですが、イエスさまを認めない人々との対立（11章2節－12章50節）が物語られた後で、13章では天の国の七つのたとえが語られます。今日の朗読箇所は三つに分けることができます。

- ①種蒔きのたとえ（1－9節）
- ②たとえを用いる理由（10－17節）
- ③種蒔きのたとえの説明（18－23節）。

イエスさまの「たとえ話」には二つの意味があります。最初の意味は、たとえ話は伝えたい内容を、より分かりやすい形で説明したものだということです。その際には、より身近なものを引き合いに出すと、伝えたいことがより分かりやすくなります。

第二の意味は、聞き手にとっては「なぞ」のまま残るということです。イエスさまが日常話されていたアラム語では、「たとえ話」のことをマトラーと呼びました。これは「なぞ」の意味があります。聞き手、あるいは読み手の常識では理解不可能なもので、語り手・話し手であるイエスさまを受け入れない人にとっては、たとえ話は永遠に謎のまま残ります。「耳のある者は聞きなさい」（9節）とは、語り手であるイエスさまを受け入れた人に対する呼びかけとなるでしょう。

短い形式の朗読では省かれていますが、18節に「だから、種を蒔く人のたとえを聞きなさい」とあります。もしかしたら、イエスさまが実際にお話になった「種蒔きの話」の本体は1－9節までだったのかもしれませんが。その後の部分は、福音書が成立していく過程で「種蒔きの話」を理解し、解釈した初代教会によって付け加えられたのかもしれませんが。

もともとのこのたとえ話のテーマは、「種蒔く人」が、いつも種を蒔き続けるというものだったと思います。それが初代教会の中でイエスさまの「たとえ話」を解釈した結果、信仰を堅く保つという理解へと変化していったのではないのでしょうか。イエスさまの「たとえ話」は、それが語られた状況では、聞き手にとってよく分かる、そして共感できる話だったのです。半農半漁で生計を立てていくガリラヤの人々にとってこの話は、自分たちの日常に則して理解してみると、よく分かったことでしょう。それこそ、ピンときた話だったでしょう。しかし、ガリラヤの豊かな自然という状況から切り離されて、「たとえ話」だけが語られ始めると本来備わっていた生き生きとした意味は失われていきました。初代教会では、神の国の福音を告げるイエスさまの言動に批判や疑問が生じたとき、それに答え、イエスさまのメッセージを説明するために「たとえ話」を活用したようです。さらには、「たとえ話」を教訓のように受け取り、イエスさまのことは生活の規範や指針のように理解していったと思います。こうして今のような福音書が成立したのでしょう。